様式 C-7-2

自己評価報告書

平成　23 年　5 月　7 日現在

機関番号：32606
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2008～2011
課題番号：20720188
研究課題名（和文）戦国文字と記録媒体に関する基礎的研究―戦国史像の再構築―

研究課題名（英文）

研究代表者　下田　誠
（ SHIMODA　MAKOTO　）
学習院大学・文学部・助教（無給研究職）
研究者番号：40448949

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・東洋史
キーワード：戦国文字・記録媒体・戦国史・青銅兵器

１．研究計画の概要

（１）研究の課題・目的

本研究課題は、中国における首長制社会（あるいは初期王朝・初期国家）から専制国家への展開を具体的に把握することである。王朝に即していえば、「夏」・殷・西周から東周（春秋・戦国）・秦漢への政体の展開を捉えることである。

中国の戦国時代は新石器時代以来の歴史的展開の結実としての側面と秦漢帝国へと接続する出発点として側面、その両面を備えた過渡期として、報告者は注目している。

具体的には戦国文字と記録媒体の基礎的研究・分析を通じて、戦国史像の再構成を行うことを課題とする。

4 年間の研究期間にはとくに戦国諸国の政治制度や手工業生産体制の違いを如実に示す青銅兵器という記録媒体の銘文を主たる対象とする。

（２）研究の計画

秦系青銅器は別経費にて進めているので、東方六国のものを対象とする。

1 年目（平成 20 年度）＝趙国兵器研究
2 年目（同 21）＝中原地域青銅器の編年
3 年目（同 22）＝燕斉兵器研究
4 年目（同 23）＝呉越・楚系青銅兵器

（３）研究の方法

4 年間の研究の方法は比較的共通しており、基本的に下記のような作業を進める。

①器形・銘文の模写→②伝世・所蔵など情報の収集整理→③字書・釈読例を検討→④自身の釈文作成

こうした作業過程において、さまざまな着想が得られる。着想を深め、検証するために関連研究を渉猟し、また精読する。

（４）研究の特色

本研究は古文字学・考古学研究の成果に学ぶ歴史学研究である。

古文字学は文字を釈読するが、なぜ銘文を記入する兵器としない兵器があるのか、或いは兵器種類の国ごとの使用傾向の違いや原材料がどこからもたらされたのか、などの課題について通常検討しない。

考古学は型式編年を行うが、伝世品を一般に排除する。また古典籍は文献史学の仕事として住み分ける傾向にある。そのため戦国時代の全体を論じるのには困難がともなう。

本研究はその間隙を結び、総合化して戦国史像の再構成をおこないたいと考えている。

２．研究の進捗状況

（１）平成 20 年（2008 年）度

2008 年 8 月、趙国兵器を多数所蔵する上海博物館において実物資料（倉庫内資料）の調査を実施した。調査では『殷周金文集成釈文』（2001 年）に未収録である背面文字を確認し、また模本や写真の収録形態に関する問題点を認識した。詳細は雑誌論文 3 番の調査報告を参照願いたい。

（２）平成 21 年（2009 年）度

2009 年 9 月、山西博物院において太原趙卿墓出土青銅器（常設展示）を閲覧し、一次史料に対する理解を深めた。

青銅器銘文を整理する際の着眼点として、「史料化」という視座に至り、その考え方に

より２本の論文をまとめた。
　これは直接には南開大学の陳絜氏の考えに基づくものであるが、報告者なりの工夫もあり、詳しくは雑誌論文１番の論考をご参照いただきたい。

（３）平成 21 年（2009 年）度
　2010 年７月、かねて調整を続けてきた河南博物院の共同資料調査が実現した。これはおよそ 40 年間非公開の状態にある倉庫内資料の実見・模本作成であり、特筆に値する成果といえる。
　また当該年度の課題である燕斉兵器研究については、東アジア世界論の文脈の中に位置づけなおすなど新たな方向性を示した。

　初年度（平成 20 度）にはすでに古文字研究会や台湾訪問（別経費）などでの活動により、戦国青銅兵器研究の国際ネットワークが姿を現し、今後も継続的な発展が見込まれる。
　また前述の戦国出土文字資料（本研究ではとくに青銅器銘文）の「史料化」という視点の獲得は、報告者の研究に独自性を付与することとなった。
　この３年間に上海博物館・河南博物院・山西博物院・四川博物院の所蔵資料を調査し、とりわけ前２者は倉庫内資料を閲覧し、模本作成をおこなうなど貴重な機会であった。
　研究成果も７本の論文（うち２本は調査報告と訳注）と３回の学会報告と一定の成果があがっている。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

　全体として研究はおおむね当初の予定通り進行中であると考えている。

４．今後の研究の推進方策

　今後はこれまでの成果を集約し、一冊の報告書（簡易製本）としてまとめたいと希望している。
　最終年度にあたる平成 23 年（2011 年）度は、初年度に前倒しで実施した台湾訪問以外は当初の計画通り進めたいと考えている。

５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）
１．下田誠「中国戦国時期青銅器銘文の史料化に関する一試論－三晋紀年銅器銘文の字形分析を中心に－」『学習院大学文学部研究年報』（学習院大学文学会）第 57 輯、2011 年、29 頁-65 頁（査読無）
２．下田誠「日本武器形青銅器と中国戦国時期三晋青銅武器との接点を訪ねて―兼ねて『物勒工名』形式銘文の一事例―」鶴間和幸・鐘江宏之編『東アジア海をめぐる交流の歴史的展開』東方書店、2011 年、3 頁-28 頁（査読有）
３．下田誠「戦国文字・戦国史研究の新展開―殷周金文集成（修訂増補本）の出版と上海博物館所蔵青銅兵器の調査をふまえて―」『人文』（学習院大学人文科学研究所）7、2009 年、107 頁-136 頁
４．下田誠「再論三晋“冶”字」『古文字研究』第 27 輯、2008 年、334 頁～340 頁（査読有）
５．下田誠「戦国時期韓国的権力構造―以上層政権的結構為中心」『周秦倫理文化与現代道徳価値国際学術研討会論文集』陝西人民出版社、2008 年、325 頁～333 頁（査読有）
６．下田誠「戦国期を中心とする中国古代国家形成論―その現状と課題」『歴史評論』699、2008 年、2 頁～14 頁（査読有）

〔学会発表〕（計３件）
１．下田誠「盧氏令戈考」（中国語）長江・三峡古文化学術研討会暨中国先秦史学会第九届年会、2010 年 6 月 14 日、中国重慶市・大礼堂賓館
２．下田誠「中国古代国家形成与青銅兵器」（中国語）中国社会科学院歴史研究所先秦史研究室主催・先秦史料研読班第八期、2009 年 12 月 18 日、中国北京市・中国社会科学院歴史研究所
３．下田誠「再論三晋“冶”字」（中国語）中国古文字研究会成立 30 周年国際学術研討会、2008 年 10 月 12 日、中国長春市・吉林大学

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：　発明者：　権利者：　種類：
番号：　出願年月日：　国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：　発明者：　権利者：　種類：
番号：　取得年月日：　国内外の別：

〔その他〕